

報告

フィリピン視察旅行報告

木村晶子・伊井義人*

はじめに

報告者は、2008年夏の時点で、人間生活学科を中心として、正規のカリキュラムに含めることを検討中であった「海外体験学習」の実施に向けて、2008年8月4日～13日に現地調査を行った。学科のみならず学部レベルでの検討も必要とのことで、視察経費は、その大部分を学部長の裁量予算で賄われた。

1. 日程および宿泊場所

2008年8月4日に札幌および石狩を出発し、成田に一泊した後、8月5日にフィリピン航空にて、マニラへと向かった。帰国は、8月12日であるが、それまでの7泊は、フランシスコ会フィリピン管区本部のペドロ・パプチスタ修道院に宿泊させていただいた。その間、フィリピン在住のフランシスコ会士佐藤宝倉神父が我々二人のお世話を献身的に引き受けてくださった。12日の夜に帰国したが、札幌への乗り継ぎ便がなかったため、羽田空港近辺のホテルに宿泊した。今回は、出国前・帰国後にそれぞれ二泊、国内で宿泊しなければならなかった。この点で、学生を派遣する場合、日程調整が必要となろう。



2. 見学施設

視察期間中、以下の九箇所の施設を見学した。

- (1) マザーテレサの修道会（神の愛の宣教者会）の男子修道会経営の「見捨てられた子ども達」の施設

* 藤女子大学人間生活学部人間生活学科准教授

本施設は、宿泊先の修道院から車で十分程度の場所にある。マニラ郊外の低所得者地域に位置する。治安も良好とはいえ、施設の周囲には、鉄製の柵が張り巡られていた。もちろん、これは、治安上の問題とともに、子ども達が施設外に出てしまうことを防ぐことも目的としているだろう。さ施設には、軽度から重度の障がいをもつ子ども達が男女合わせて、30名程度、入所していた。

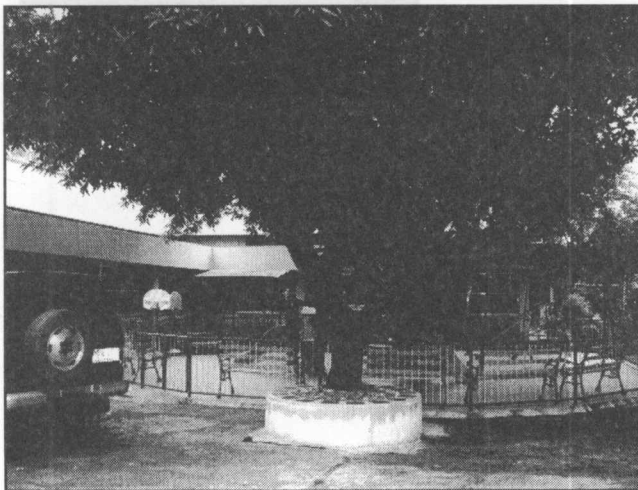


数名の施設職員は、宣教会から派遣されていたが、その他の大部分の職員は、地域のボランティアである。そのため、専門的なケアをするというよりもむしろ、必要な食事を提供し、子ども達と寄り添うことが、この施設の主目的であると考えられる。

本施設は、施設周囲の環境や施設職員の専門性などからも、学生の長期間の派遣は困難であると考えられる。派遣するとしても、半日もしくは一日程度の短期間ではないだろうか。

(2) マザーテレサの修道会（神の愛の宣教会）の女子修道会経営の「死を待つ人の家」および付設老人ホーム

本施設は、マニラ市中心部に近く、幹線道路に面している。しかし、施設に通じる門を抜けると別世界のような静穏な環境が整えられていた。女子修道会が経営する職業学校も併設されている。そのため、施設内は高齢者ばかりではなく、若い女性も多く出入りしており、活気のある雰囲気を有していた。施設の目的は、入所者のケアと同時に、死を覚悟しなければならない高齢者に寄り添うことである。「死を



持つ人の家」とはいえ、施設の日当たりも良いこともあり、全体的な雰囲気は明るかった。もちろん、その中でも「死」に直面しなければならないという厳しさもある。そのため、派遣学生にとっても、「バランス」が良い施設であると考えられる。宿泊設備が、本施設にはなく、施設研修をする場合は、他の場所から通う必要がある。

(3) マザーテレサの修道会（神の愛の宣教者会）の女子修道会経営の「見捨てられた子ども達」の施設

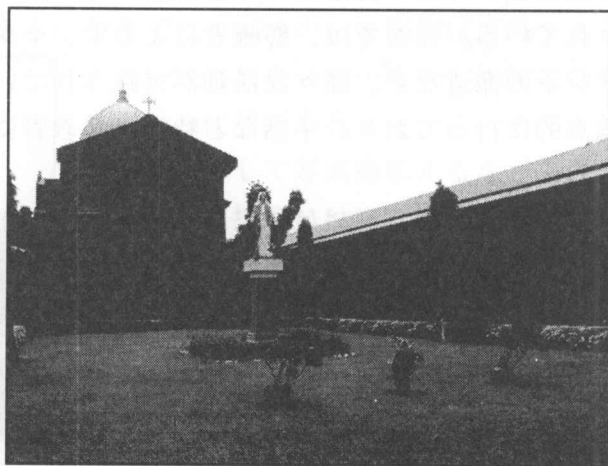
(2)の施設の対面に位置しており、同じく幹線道路に面している。施設の目的は(1)と同様である。しかし、経営が男子修道会と女子修道会の違いからか、施設が醸し出す雰囲気は非常に異なり、明るい雰囲気を出そうと努めているように感じた。また、入所している子ども達は軽度から重度の障害を持っており、人数も(1)と比較しても多い。その中には、乳幼児期の子どもが含まれている。衛生面や指導体制など、様々な観点から、(1)よりも学生派遣の可能性は高いのではないかと考えられる。宿泊施設が確保できれば、数日間の派遣も可能であろう。

上記三つの施設は、マザーテレサの修道会によって管理運営されているが、(2)・(3)の方が(1)よりも、組織的、施設の的に充実しており、学生派遣の可能性も高いと考えられる。特に、2008年夏の時点で(2)の施設には日本人のシスターが、(3)には東京・山谷で生活経験があるシスターが奉仕していた。そのため、日本からの派遣学生の習慣などにもある程度、理解・寛容さを持ち合わせているのではないかと考えられる。

(4) ヴィンセンシオ・ア・パウロ修道女会経営のケアハウス

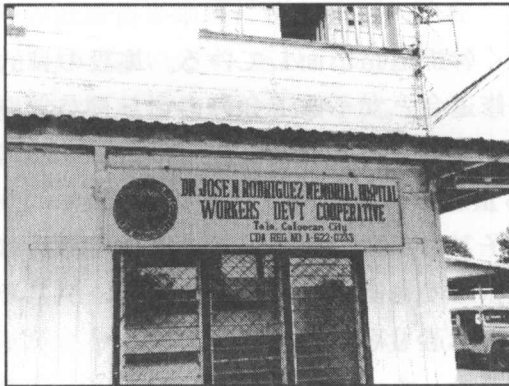
マニラ市の中心部に流れる川の中州に位置する施設である。川岸には、大統領府（マラカニアン宮殿）が見える。

大型のショッピングセンターまでも徒歩圏内にある。施設としても大規模であり、ケアハウスよりも、病院と表現できるほどである。施設の入所者も乳幼児から高齢者まで多様である。また、障がいを持った方から、何らかの理由で家族と一緒に住めない方まで、入所理由も様々である。



さらに、施設には学校も付設されており、ケアに関連する資格も取得可能である。海外からも留学生を毎年受け入れている実績もある。しかし、教授言語は英語であるため、派遣学生が資格取得を希望する場合は、一定程度の語学力も要求される。また、宿泊施設も充実しており、質素ではあるが、安価で長期間滞在することも容易である。宿泊施設など総合的に考えても、学生に一定程度の語学力があれば、本ケアハウスに派遣するのが適していると考えられる。

(5) ハンセン病療養施設



本施設は、国際的にも著名なハンセン病患者を対象とした療養施設である。マニラ市から車で一時間程度の郊外タラ村にある。交通状況によっては、それ以上、時間がかかる可能性もある。しかし、マニラ市内とは異なり、緑に囲まれた環境にある。施設は、ハンセン病患者が入所可能になっているとともに、病院の機能も果たしている。そのため、病院側の入

り口には、診察を待つ多くの地元民がいた。また、ハンセン病に関する資料室が設置されており、そこには英語を話すガイドが常駐している。そのため、知識ベースの研修としても、非常に有用な施設である。

施設外には、ハンセン病の元患者が療養施設を退所して居住しているコミュニティも数箇所点在している。彼(女)らが、勤務している「人形工場」も近隣にある。学生の派遣は困難かもしれないが、半日もしくは一日程度の滞在ならば、非常に有意義な場所であると考えられる。

(6) 聾啞者施設

本施設は、今回の視察旅行でお世話になったフランシスコ会士佐藤宝倉神父が奉仕されている。ここでは、聾啞者によるTシャツ作成や学校へのティーチングアシスタントの派遣など、様々な活動が実践されている。特に聾啞者に対する教育支援は重点的に行っており、手話など特別支援教育に関心のある学生には最適の場所であろう。

また、同施設の二階には、二段ベッドベットが置かれており、宿泊施設もある。そのため、少人数の学生ならば宿泊も可能である。また、交通の便も比較的良い場所であり、この施設をベースにして、他の施設での研修も含めた中長期の学生派遣は可能であろう。

(7) カトリック教会および聖クララ会修道院

フィリピンの国民の大半はカトリック教徒である。そのため、総合的に考えると日本と比べ、カトリックに対する国民の信仰心は篤い。本視察旅行中も、幾つかの教会を訪問する機会を得た。訪問中、幼児の洗礼式に与る機会があり、カトリックの家族の行事を体験することができた。また、8月11日は聖女クララの記念日であっ

たので、近隣の聖クララ会における荘厳なミサに参加することもできた。この日は街一体がお祭りとなり、ミサは朝5時から夜9時まで十数回にわたって執り行われるということで、日本では決して体験できないものであった。

教会建築そのものも、またそこで行われるミサの雰囲気も、日本のそれらと異なる。そのため、異文化的な体験をする上でも、また、カトリックに関する事柄を理解し、深めるためにもカトリック教会を訪問することは、学生にとっても有意義であると考えられる。



(8) その他

他には、マニラ有数の観光地であるアラヤ博物館（フィリピン歴史博物館）や旧スモーキー・マウンテンを訪問した。アラヤ博物館は、植民地時代前後から現在までのフィリピンの歴史や文化を知る上では、非常に重要である。また、歴史もジオラマ展示を通して学べる。そのため、フィリピン訪問前に簡単な歴史を学んでおくと、それらが何を意味している場面なのかをすぐに理解できる。展示にも英語表記が含まれているため、簡単な英語が理解できれば、歴史や文化についても親しみをもてよう。

かつて、フィリピン・マニラ市の低所得者地域の代名詞であったスモーキー・マウンテンは過去の遺産となりつつある。現在では、ゴミの山の面影は認識できるものの、緑も目立つ。一方で、周囲にはまだ貧困層の住居が点在している。そのため、学生が大挙して写真撮影するなど、観光気分を訪れる場所には、未だなっていない。佐藤神父によると、フィリピン郊外に、ゴミによって出来つつある新しい「山」があるとのことである。訪問する意図などを考慮しつつ、観光計画を練らなければならないだろう。

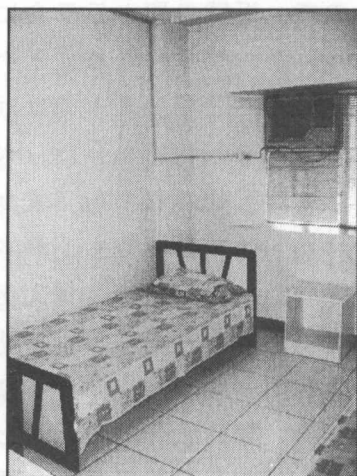


3. 実施の可能性および検討課題

第一に宿泊施設である。ヴィンセンシオ・ア・パウロ修道女会経営の施設に付属の宿泊施設があり、一日750ペソ（1,600円程度）で泊ることができる。ここでは、各種の福祉実習が可能である。アメリカなどからも毎年、実習に来る学生を受けい

れており、単位の認定制度があり、資格取得も可能である。また、マニラ郊外のケソン市にクラレチアン会の女子寮があり、こちら側の具体的に計画が決まれば、宿泊を提供して下さる確約を取っている。ただし、現在の学生が、宿泊施設にどの程度の質を要求しているのかを明らかにする必要がある。費用の面は当然、学生の関心事であることが予想されるが、どの程度の「清潔さ」を求めているかが、一番重要であろう。

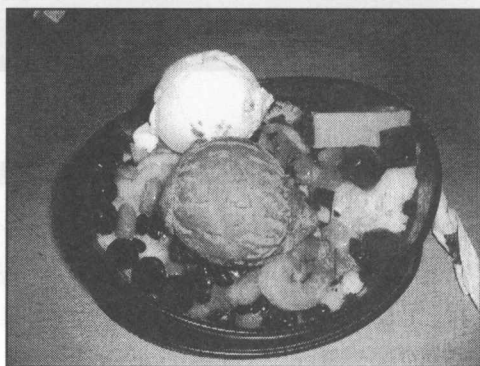
第二に、人的な問題である。参加者数に拘らず、やはり引率教員は最低二名、必要である。できれば男女一人ずつの引率が望ましい。フィリピンの衛生状況や食生活は、日本とは異なる。そのため、今回の視察旅行中、報告者二人も体調が万全でない時期もあった。また、参加者は当然全員が女子であるため、女性教員が必須であることは言うまでもない。一方で、治安上の関係から男性教員も必要であろう。



第三に、交通手段である。フィリピン、特にマニラ市の交通事情は、日本とは異なる。レンタカーで、学生を乗せ、訪問地に向かうことは不可能である。そのため、滞在中は、専用車(バス・ワゴン)とドライバーが必要となる。公共交通機関も考えられるが、「経験」として利用するのは良いが、日常の移動手段として用いるのは困難を伴う。利用するには、信頼できるガイド、特

にタガログ語が堪能な現地ガイドが必要不可欠である。治安の問題からも、今後学生を引率する際には、教会関係者あるいは修道会関係者の協力を得ることが一番望ましいと思われる。

第四に、事前・事後指導についてである。学生を募集し、ある程度希望者が確定した段階で、多少の英語レッスンとフィリピン事情・生活文化の学習が必要である。特に、「ヴィンセンシオ・ア・パウロ修道女会経営のケアハウス」に派遣する場合には、中上級程度の英語力が必要である。中上級英語技能を参加要件にすると参加者が少ない可能性が多分に考えられる。そのため、必要な英語力と現実の学生の英語力のバランスを考え、募集していかなければならない。フィリピン事



情や生活文化に関しては、治安や最低限の生活習慣に関する講義で良いであろう。石狩市もしくは札幌市在住のフィリピン人もしくは専門家にゲストスピーカーとして来校していただくことを考えている。

第五に、研修旅行の内容を検討する必要があるだろう。一定数の参加者を見込むためには、魅力的なツアー内容が必要となる。施設研修だけではなく、一日は観光やレジャーも含めた方が良いかもしれない。また、全体の日程も一週間にするか、数週間単位にするかは検討が必要である。ただ、最も大切なことは、この研修旅行の目的を明確化することである。確かに海外での施設研修は、参加者の人生観や考え方を一瞬で変える効果があるかもしれない。しかし、学生に対してどのような変化が望まれるのか、我々、学科としての見解も重要である。

おわりに

今回は、佐藤宝倉神父のガイドのおかげで、大変有意義なフィリピン滞在ができ、また、宿泊や食事、移動などすべてにおいて順調に視察することができた。想像以上の貧困や福祉対策の格差を目の当たりにし、「百聞は一見にしかず」ということわざ通りであると感じた。

本学科が目指している理念にそって社会貢献しようとする人材を育成する上で、単に映像等からの知識だけではなく、実際に空気に触れ、現地と人々と触れ合う体験をすることは、おおいに役立つと言えよう。フィールド実習の一環として、また、単位化をめざして、今後のより具体的な検討を進めてゆきたいものである。